婦人の目

祭壇を作った子

藤屋　紀子

何がきっかけであったか、今はもう思いだせないが、長男が去年の秋ごろ「僕の祭壇を作る」と言いだし、「何の飾りも、絵も書いてない〝おぼん〟と、ミルクピッチャーを一つちょうだい」と注文してきた。

渡したおぼんの中に、彼は自分の持っているありったけの聖具、ご像を並べ、ローソクを立てた。

それが彼の祭壇となり、日に何度も何度もマッチをすり、ローソクをともし、祈りをし――といっても三十秒くらい――そして、非常におごそかにミルクピッチャーをさかさまにし、ローソクを消すのである。

はじめ私たちは、マッチがすれるようになったのがうれしくてやっているのだろうと思っていたし、姉たちもうるさく祈りにさそわれるので、長男の祈りに合わせて、「主よ、弟の火あそびをお許し下さい」とニヤニヤしていたが、一か月、二か月、とうとう半年たっても彼の聖なる祈りは続く。家族はひきずられて、日々の祈りは彼の祭壇の前でするようになった。

今、ローソク立てになっている天使像の顔はすすで黒くなり、おぼんはろうで見る影もなくなってきている。が、ふと神の国の姿はこんな所にひそかに息づいているのではないかという気がしてくる。

一つの本当に小さな種子の中にひそんでいる生命、それは、成長していくもの、育っていくものである。子供たちには、もうすでに神の手によって、それぞれの心に種子は入っているのだろうか。やがて、それは殻を破って芽吹くための力を貯えているのだろうか。

種子から生命が出て、育つために土の中に籠（こも）らなければならない。ひそやかな所、人の目に触れることのない深い場所。その場で、どのように種子は根を出し、根をおろすのか。私たちには見るすべもない。

しかし「神の国は近づいた。もう来ている」（マタイ12章）とイエスは言われる。

長男の作った祭壇は、いろいろなものに「似ている」と言われる。神の国に向かって歩く人となるように、私たちに呼びかけてくれているような気がしている。

（主婦）